

研究課題名	間質性肺炎合併肺がんの予後とそれに影響を及ぼす背景因子についての検討
研究責任者名	広島大学大学院医系科学研究科分子内科学 教授 服部 登
研究期間	実施許可日 ～ 2027年12月31日
対象者	2016年1月から2023年3月までに本院を受診された成人患者のうち、治療を受けた肺がん患者さん
意義・目的	<p>「間質性肺炎」は一般に治療が困難な慢性呼吸器疾患です。「間質性肺炎」は特発性肺線維症や非特異性間質性肺炎等様々な種類の間質性肺炎を包含しており、疾患の進行度や予後、治療反応性などは多岐にわたりますが、基本的には慢性的に肺に炎症が起こりその後の線維化をきたします。</p> <p>また気道感染や環境曝露、薬物療法等により急性増悪することが知られています。</p> <p>特発性間質性肺炎症例における肺がん合併率は、特発性間質性肺炎のない症例の7～14倍高く、4～15%の症例に肺がんの合併があると報告されており、間質性肺炎合併肺がんは実際の診療現場でも比較的好くみられます。</p> <p>しかし、間質性肺炎合併肺がんは間質性肺炎の合併を理由に十分に治療されなかったり、治療により直接・間接的に間質性肺炎急性増悪が起こったり、治療とは無関係にも間質性肺炎急性増悪が起こったりし、非合併例に比して予後不良とされています。間質性肺炎急性増悪の危険性は、化学療法に伴うものが10～25%、放射線療法が25%、化学放射線療法が23～36%と見積もられています。そのため間質性肺炎合併肺がん症例においては手術・放射線治療・化学療法における治療選択が制限されているのが現状です。</p> <p>その一方で現在では肺縮小手術の拡大、放射線治療精度の進化、免疫チェックポイント阻害薬や分子標的治療薬等化学療法も適応薬剤の拡大がみられ、実地臨床においては間質性肺炎合併肺がん患者さんの治療予後について再検討する意義があると考えられます。</p> <p>以上の背景から、間質性肺炎合併肺がんにおける治療予後を明らかにし、それに影響を及ぼす背景因子を検討することで、新たな治療標的を推定することにつながれると考えています。</p>
方法	<p>本研究は、診療録（カルテ）情報および病理標本を調査して行います。情報は、本学における実施許可日（2022年10月20日）以降に使用します。</p> <p>カルテから使用する内容は、患者背景、血液検査所見、画像所見、病理所見、臨床経過です。（個人を特定可能な情報は解析に用いません。）</p> <p>病理標本においては、手術時に得られた肺切除検体の残余検体を用いて免疫染色を追加で実施して検討を行います。本学単独研究のため、他の機関への情報提供は行いません。</p>
共同研究機関	ありません
試料・情報の管理責任者	広島大学大学院医系科学研究科分子内科学 教授 服部 登
個人情報保護について	

調査内容につきましては、プライバシー保護に十分留意して扱います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心ください。研究に資料を提供したくない場合はお申し出ください。お申し出いただいても不利益が生ずることはありません。ただし、すでにこの研究の結果が論文などで公表されている場合には、提供していただいた情報や試料に基づくデータを結果から取り除くことが出来ない場合があります。なお公表される結果には、特定の個人が識別できる情報は含まれません。

また、本研究に関するご質問等あれば下記連絡先までお問い合わせください。ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報等の保護や研究の独創性確保に支障がない範囲内で、研究計画書および関連書類を閲覧することができますので、お申し出ください。

問合せ・苦情等の窓口

〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3 T e l : 082-257-5196

広島大学病院呼吸器内科 助教 中島 拓